



「男なら、かみさんなんて、10人ぐらい娶ったら良いんだよ、がはははは」、60歳はゆうに超えているおばあさんが揺り椅子に揺られながら語った言葉である。場所はインドネシアのバンテン州セラン県A郡。イスラーム教の教えでは男が4人まで妻を娶ることができるので、一夫多妻制を問題視しない人がいてもまったくおかしくない。でも、女性の側から露骨にそうした意見がでてきたのにはさすがに驚いた。地域研究の醍醐味の一つに、その地域の人々が極めて当たり前のように語る言葉の意味が分からずに、当惑・混乱・動揺するということがある。このおばあさんの言葉というのは、まさに私の理解を超えたものであった。なんなのだろうか。

このおばあさんの旦那はバンテン州にたくさんいるジャワラである。ジャワラというのは、日本語で言えばヤクザに相当する人たちのことで、今でもバンテンの田舎の村では「娘をよこせ」と山刀を村人に突きつけたり、村の市場でショバ代をせびったりしている。こうした人に嫌われることをする傾向を持つジャワラは「黒いジャワラ」と呼ばれ、一方、悪人退治をして村の平和を守るようなジャワラを「白いジャワラ」といって区別することもある。いずれにしても、ジャワラたちはインドネシア拳術（ブンチャク・シラット）に長けていて、気質が粗く、腕っ節が強く、男気を尊ぶ傾向が強い。村人が恐れるか、尊敬しているので、村長になるジャワラも多い。暴力をふるう可能性を持っていて、ときどき本当にふるうことが彼らの強みである。正装は真っ黒の上下に山刀である。あるとき、ジャワラたちに話を聞いていたとき、「今、おまえはどここのホテルに泊まっているんだ？ 安全のためにも、我々の組のジャワラ2人をホテルの前に差し向けてやるから教

やくざ、暴力、そして呪力

岡 本 正 明*

えろ！」なんてことまで提案してくれたこともある。真っ黒の服に山刀を帯びた2人に24時間体制で護衛されようものなら調査どころじゃないので、そのときは穏便に断った。

さて、ジャワラであるが、考えてみれば、こんなタイプの人にはバンテンに限らず世界中のどこにでもいる。でも、バンテンの場合、その数がどうも目立って多いようで、バンテン地区警察本部長は2004年に「バンテンには85万人のジャワラがいる」とまで言っている。バンテン州の人口は900万人程度であるから、実に10人に1人ぐらいがジャワラというとんでもない数値である。誇張だと言えばそれまでだが、他地域と比べてもさまざまなジャワラ集団に属している人が多いことは間違いがない。そして、さらにすごいのは、一部のジャワラ集団がバンテン州の政治経済まで牛耳っているのである。ハサン・ソヒブ率いるラウ・グループがその集団の俗称で、ハサン・ソヒブの愛娘が州の副知事（現在、知事代行）になって、ラウ・グループが大半の公共事業を独占しているのである。このハサン・ソヒブにまつわるエピソードは数限りない。例えば、今年で76歳になるはずのハサン・ソヒブは去年、女子高生を嫁に迎えてジャワラらしさを存分に示したばかりである。また、彼の娘である副知事も父に負けてなんかいない。副知事になってから、その権力がなせる技なのか肌の色は白さを増し、きれいになってきているのだけれども、土建業社長の旦那は尻に敷かれているせいか、さすがを他の若い女性に求めてしまったことがあった。浮気話を聞きつけた副知事は当然黙ってなんかいない。男のジャワラ顔負けの迅速な行動に出たのである。その不倫相手が勤めるジャカルタの五つ星ホテルに乗り込んでいき、入り口でその女性が視界に入るやいなや、接近していき、罵声と共にひっぱたき、ひっかき、足でけりを入れた。この穏やかならざる娘の振る舞いにはさす

* Okamoto Masaaki, 京都大学東南アジア研究所；
Center for Southeast Asian Studies, Kyoto
University

がのハサン・ソヒブも驚いた。彼は、警察・裁判沙汰になることを恐れて、バンテンから車でジャカルタ州警に出向いてもみ消しをお願いして、バンテンに帰ってくるや否や卒倒してしまった。そのときには、不死と言われたハサン・ソヒブ「死亡説」が出回ったものである。ちょうどその頃、私はハサン・ソヒブへの2度目のインタビューを申し込んで、それが曖昧な理由で断られたところだったので、この死亡説が流れたときには「ついに大物ジャワラ倒れる！ ジャワラ集団間の跡目争いが始まるのか」と興奮したものであった。

このジャワラたち、どうも大物になろうとするなら、単に腕っ節が強いだけでは駄目なようで、呪力も持っていたほうがよい、というか、持っていると思われていた方がよいようである。ハサン・ソヒブも当然、呪力があると思われているし、その類のエピソードもある。でもここでは、昨今、急速に台頭してきている集団「全バンテン人潜在能力領導会」



写真1 領導会の詰め所



写真2 領導会幹部たちとともに

の幹部、バンテン州地区本部長の例をあげよう。

この「領導会」は98年にできてから急速にジャカルタ近辺を中心として勢力を拡大していき、公称では2006年2月時点で全インドネシアに870万人の構成員を抱えるまでになっている。主な仕事は土地収用支援、企業・工場・市場・ホテル・カラオケ警備、労働者調達などである。そのバンテン州地区本部長は、拳術にも長けているし、イスラームの知識もある。でも、それだけじゃないことが、この2月に彼と会ったときに分かった。彼には呪力があって、霊界と交信ができるらしい。彼は当地の有名なジャワラの一家なのだが、霊界との交信の結果、初代人類のアダムとイブから数えて第64代目にあたるのが分かったという。彼の手元のノートには、アダムとイブから数えて確かに64番目に彼の名前が書かれてあった。まずこの古びたノートのアダムとイブに驚かされ、更に、霊界との交信用の部屋（「霊界の間」？）から猟銃を持ち出してきて、「私はこの銃で手を撃ったが、何ともなかった」ことを教えてくれた。これは呪力のおかげなのだろう。次は神秘療法の出番である。ときどき彼のもとに病人が来るそうで、そのときには「霊界の間」に病人を呼び入れ、そこで治療を施すと治るそうである。こうやってどんどん私の頭を意味不明の深い闇に落とし込んでくれたところで、そのことを察したこの幹部のおじさんは、「ちょっと今回は『深い』(dalam)とこまで突っ込みすぎた、分かるか？ きっと、日本のような進んだ(modern)国にいるお前には分からんだろう」とふっかけてくる。私の方は、「はい、分かりません、頭が痛くなってきました」(“Ya, Pak, saya ngak mengerti, pak. Otak saya jadi pusing, pak”)と素直に返した。すると、「そうだろう、そうだろう」といった表情をして、新たな事実を開示してくれた。

「本当に私が困ったときには、『プラブ・シリワンギ』や『ニヤイ・ロロ・キドゥル』に連絡を取って、彼らから助言をもらうんだ。例えば、次の県知事は誰になるかを聞いたりするんだよ」。プラブ・シリワンギというのは、15世紀に西ジャワで栄えたパジャジャラン王国の国王であり、ニヤイ・ロロ・キドゥルというのは、伝説の「南海の女王」のことで、前者は既に遙か昔に死んでしまっていて、後者はそ

もそも存在しているかどうか分からない。

さて、彼はこう語りながら、おもむろにノキア社製の携帯電話を取り出してくれた。そして、『『ニャイ・ロロ・キドゥル』や『ラブ・シリワンギ』と連絡を取るときには、この携帯電話を使うんだ。本当に大事なときにしか連絡を取らないんだ』、こう言って、携帯電話を操っている。『『ニャイ・ロロ・キドゥル』の電話番号は、0842×××……、『ラブ・シリワンギ』の電話番号は……』と電話番号まで教えてくれた。私に同行してくれたバンテン人によると、0842で始まる携帯電話番号は（この世には）存在しないそうである。さてさて、ここまで来ると、私の脳のインパルスも通常の流れとは変わり始めていて、「携帯なら、電波が人工衛星まで届いているのだから、もしかすると、霊界を経由するのも知れない」と、つつい思ってしまう。それにしても、霊界との交信に携帯電話が登場して、IT化の波が押しよせてきているとはすごいことである。次世代には、霊界の方々と会話の出来るロボットなんかも出てくるのかも知れない。

やくざ、男気、浮気、呪力など、ここまでとりとめ

もなく書いてきたところで、はじめの問いに戻ろう。あのおばあさんの発言は何だったのだろうか。やくざ、男気なんて書くと、男尊女卑的な発想が強い社会を想像するし、実際、このジャワラの世界はそんなところがある。こうした世界で生きていれば女性もまたそれを当然のこととして受け入れているから、あのような発言が不自然さを感じさせずに出せるのだ、ということも出来るかも知れない。だが、たぶん、違うのだろう。副知事のような豪傑女性がいて、実にその行動はジャワラの世界では必ずしも否定的に評価される訳ではない。そうしたことからすると、あのおばあさんの言葉というのは、ジャワラである旦那があちこちをほつき歩いて愛人を作りまくったのに、その旦那にも愛人にも何もできず、その無念さが時とともに諦観に代わって生まれた逆説的な発言だったのではなかったかと思う。

それにしてもインドネシアは奥が深いところである。いつのまにか、この深みにはまって、日本の常識の泉がどんなものなのか分からなくなるかも知れない。まあ、それも一興か。

タイ研修旅行

柳 澤 雅 之*

はじめに

京都大学では、国際交流科目という講義が2005年度からはじまった。学部の1・2回生を対象とした全学共通の科目として開設され、海外で学生に研修旅行を受けさせ、単位を与えるものである。最初の年である2005年度は、経済研究所の北野先生や、国際交流センターの森先生が中心となって進めた中

国・上海近郊の研修旅行と、東南アジア研究所が進めたタイでの研修旅行とがおこなわれた。本稿では、東南アジア研究所の山田勇先生と筆者が同行したタイでの研修旅行について、とくに、その具体的な内容ではなく、筆者が感じた意義について述べてみたい。

応募者

タイでの研修旅行に参加する学生を2005年10月に募集すると、9学部から39名の応募があった。小論文による選考を経て、このうち、総合人間学部・文学部・経済学部・工学部・農学部の5学部、13名

* Yanagisawa Masayuki, 京都大学地域研究統合情報センター; Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

(女性8名、男性5名)がタイの研修旅行に参加した。多数の応募があったにもかかわらず、研修旅行の性格から、参加人数を制限せざるを得なかったのは残念なことであった。

研修旅行先の決定

タイでの研修旅行は、2006年3月6～20日にかけて、タイ国カセサート大学の全面的な協力のもと実施された。研修旅行の訪問先は、カセサート大学 Pongsak Sahunalu 名誉教授が作成した案をもとに、同大学国際交流部門のスタッフが実際に訪問先予定地を訪れ、アポイントメントの取り付けだけでなく、宿舍の確保や食事場所の確認をおこなった。今回の講義科目名は「変容する東南アジア——環境・生業・社会」であり、タイの環境問題や、開発の功罪等について学ぶことが主たる目的であり、訪問先は環境関連の機関がほとんどであった。訪問先や日程の詳細は附表を参照されたい。

研修旅行の意義

今回の研修旅行は、参加者にとって大きくふたつの意義があった。ひとつは、あたりまえだが、タイあるいは熱帯の森に関するさまざまな問題を学び、実際に目の当たりにすることができた点である。訪問先では、それぞれの機関・場所でおこなわれているさまざまなプロジェクトについて英語で説明を聞き、質疑応答をおこなった。森林保護、環境と開発、貧困撲滅、省庁の縦割りを超えたロイヤルプロジェクト、JICAによる国際援助などについて広く学ぶことができた。短期間ではあったが、言葉による知識だけでなく、実際に目で見て手で触って得ることができる情報は、現場を理解するうえでとても重要であることが、とくに参加学生にはよく理解できたことだと思う。また、今回の研修旅行の訪問先は森林や環境に関する機関が多かったが、そうしたことに関心のない学生にとっても、タイという社会に身をおき、タイ人とつきあいタイについて考えることが、タイを知り、ひるがえって、日本や自分たちの暮らす地域を知ることにつながるということが十分理解できたと思う。これは、海外研修旅行における

重要な意義のひとつである。

もうひとつの意義は、タイ人や日本人の引率者とともに、2週間の共同生活をしたことに付随する事柄である。今回の研修旅行の移動手段はすべて車であった。2台のバンおよび1台の荷物専用ピックアップ車に、引率者と学生が混合して分乗した。附表のスケジュールを見ればわかるように、2週間で、タイの北部・東部を広く旅行したため、車中で、さまざまなことを話す時間があった。車中は、「おしゃべり自由、何を聞いてもOK」の少人数クラスであった。この車中での会話がとても重要であった。

車中の会話

車中では、車窓の風景から何を読み取ることができるかや、タイの自然・社会・文化・歴史の概略について、引率者が説明した。前日までに受けた講義の疑問点も車中で確認された。そうした車中での会話は、研修旅行の内容に沿ってさまざまな事柄を、聞く者の理解レベルに応じて説明するよい機会になった。少人数クラスの強みである。

さらに、会話の内容は、旅行当初は、「どこのケーキ屋さんがおいしい」とか、「言葉が訛っているね、どこの生まれですか」「先生は奥さんとうちやうって知り合ったのですか」というようなあたりさわりのない話であったが、日を重ねるにつれ、教員の研究上のパーソナルヒストリーから、考えることとはどういうことか、研究の意義は何か、学問とは何か、人生についてどう考えるのか、美とは何か、世界とは何か、というような大きく抽象的なテーマにまで話がおよんだ。

研修旅行のもうひとつの意義

日本の教育システムでは、ほとんどの人が高校を卒業するまで、比較的に変わらない人間関係の中で生活している。しかし、大学入学以降は、個人によって大きな差があるが、多くの人と付き合うことができる。人との付き合いは自分を見つめなおすことにつながる。人と接することで、それまで自分で考えてきたことをベースにさまざまな疑問が湧き上が

り、ぶつけあう。それは、車中の会話のように、きわめて身の回りのことから、問題があまりにも大きすぎて、禅問答のようなものまで含まれる。日本人学生にとって大学生活は、精神的にも制度的にも、自分を相対化する時期である。

そんな時期に、自分とは異なる言語、文化、習慣、考え方の人たちと接することは、大学や日本の中でだけでなく、世界の中で自分を相対的に見つめることであり、世界の中で、自分に何ができるのかを考えることにつながる。精神的な成長を促す場を提供することこそが、海外研修旅行のもっとも大きな意義のある点である。

地域の意義

しかし、このことは、何も海外研修旅行を受けた学生にのみあてはまることではない。地域研究をおこなう者にも同様にあてはまる。人と接しない地域研究が存在しない以上、地域研究者にとって地域とは、研究者自身が成長することを促す場である。先達の地域研究の軌跡を見れば、その方法論や考え方が年を経るとともに必ずしも同じであったわけではなく、試行錯誤の跡がうかがえる。地域研究では、ディシプリンがまずあって、それに沿って地域を研究するのではなく、地域が研究を進める上でのディシプリンを決めるものであるとはよく言われることであるが、同様に、地域で人や物事に会う中で形成される研究のプロセスが地域研究者を形づくるようだ。たとえ長年同じ地域を研究対象としていても、そこから常に刺激を受け変わっていきけるような、感受性と柔軟な思考力を持った人間であることが地域研究者には求められよう。中年にさしかかるひとりの地域研究者が学生に出会って相対化を迫られた研修旅行であった。

附表 事前・事後の講義および旅程

・研修旅行前の講義

熱帯病の知識と海外渡航についての注意(松林公蔵)

タイの歴史(小泉順子)

タイの少数民族とエコツーリズム(速水洋子)

タイの農業研究史(河野泰之)

タイの宗教と環境問題(林行夫)

・研修旅行の旅程

3月6日(月)

大阪発、バンコク着、バンコクのホテル泊。

3月7日(火)

午前9:00, カセサート大学にて Dr. Thanwa による歓迎会。

午後1:00, 同大学にてタイの自然環境について講義を受ける。夕食はカセサート大学主催の歓迎会。バンコクのホテル泊。

3月8日(水)

午前7:30, ホテル発、チェンライへ向かう。

午前12:30, Tak 付近で昼食。

午後4:45, Phayao 県 Maegar Seed Orchid 着。

午後7:30, Chaing Rai Forestry Training Center 泊。

3月9日(木)

午前7:00, センター内にて植物についての講義を受ける。

午前9:00, センターを出発し、午前10:00, Doi Tung Villa 着。Late Princess Mother Commemorative Hall にて、タイ・ミャンマー・ラオス国境地域の Royal Project について講義を受ける。Chaing Rai Forestry Training Center 泊。

3月10日(金)

午前7:30, センター発、チェンライ近郊の Rong Khun 寺訪問後、午前10:45, Huai Hong Krai Royal Development Study Center 着。森林再生プロジェクトについて学ぶ。

午後4:10, センター発、チェンマイへ。チェンマイのホテル泊。

3月11日(土)

午前8:00, ホテル発、午前8:45, Maejo 大学着。大学にて遺伝資源の収集・保存とその利用に関する講義・見学。

午後2:20, チェンマイ市内で昼食後、出発。

午後2:45, Doi Sutep National Park 着。タイ国 Sirikit 王妃のチェンマイ訪問と重なり、講義・見学はキャンセル。Doi Sutep 寺参拝。チェンマイのホテル泊。

3月12日(日)

午前7:30, ホテル発, 午前8:45, エコツーリズムを実施している Pha-nokkog Village 着。

午前10:30, 同村発, 午前11:35, 下流の Mungkum 村のパブリカ栽培農家にてインタビュー。

午後2:10, Queen Sirikit Botanic Garden 着。熱帯の植物について学ぶ。チェンマイのホテル泊。

3月13日(月)

午前8:10, ホテル発, 午前10:10, Doi Inthanon National Park 着。標高によって変化する植生の観察。

午後1:00, 国立公園内のトレッキング。チェンマイのホテル泊。

3月14日(火)

午前8:15, ホテル発, 市内のチーク並木を見学後, 午前9:40, Thai Elephant Conservation Center 着。木材搬出のための象のトレーニング方法について学ぶ。食事後, バンコクへ。バンコクのホテル泊。

3月15日(水)

バンコク市内観光, 歴史遺跡めぐり。京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所訪問。バンコクのホテル泊。

3月16日(木)

午前7:15, ホテル発, 午前10:15, Nakhon Ratchasima Forest Nursery Center No. 4 (Reforestation and Extension Project in Northeast Thailand) 着。植林プロジェクトに対する JICA の関わりについて学ぶ。昼食後, 午後2:00 出発。午後3:00, Sakaerat Environmental Research Station 着。タワーを利用した熱帯林の林冠研究について学ぶ。夜は誘蛾灯に集まる昆虫の観察。ステーション内のゲストハウス泊。

3月17日(金)

午前8:30, ステーション発。

午後1:15, Kao Soi Dao Wildlife Breeding

Center 着。野生動物の保護について学ぶ。

午後3:15 発, 午後5:20, チェンタブリ県にある国立公園管轄ゲストハウス泊。

3月18日(土)

午前8:00, ゲストハウス発, 午前10:00, Study Center for Development of Koong Kraben Bay 着。マングローブ林の再生プロジェクトや開発問題について学ぶ。

午後1:00, センター発, 午後4:00, パタヤ着。パタヤのホテル泊。

3月19日(日)

パタヤからバンコクのカセサート大学に戻る。まとめの会議と修了書授与。午後は自由時間。夕方空港へ。午後10:05 発の夜行便にて日本へ。

・研修旅行後の講義

東南アジアの中でのタイの生態的位置づけ(山田勇) 総合討論

謝 辞

本研修旅行は、本文中にも記したが、カセサート大学の全面的な協力のもとにおこなわれた。とくに、本計画を立案していただいたカセサート大学名誉教授 Pongsak Sahunalu 教授, カセサート大学副学長 Suparmart Panisakul 教授, 同大学副学長 Dr. Thanwa, 同大学国際交流部門長 Ms. Phacharavadee Paerattakul, 同部門 Mr. Somsakdi, Pi' Tim, Pi' Nean, 旅行に同行してくれた教員の Dr. Sujitta Raungrusmee (Ajarn Than), Dr. Chongrak Wachrinrat, そして、3台の車の運転手さん Pi' Noi, Pi' Toi, Pi' Tu および、すべての訪問先でお世話になった人たちに心から感謝いたします。

また、帰国後、研修旅行に参加した13名の学生さんから心のこもった色紙と大吟醸を頂いた。この場を借りてお礼申し上げます。